

寺島和美作 「新世界」

音楽 (不安そうな感じ)

村田恵子(モノローグ) ああ、体中が痛い。手足が鉛のようだわ。ここはどこ？ わたしは何をしてるの？ ああ、そうだ、わたしは死のうとしたんだわ。でもわたしはまだ生きている。わたしは助かったんだ。だけど、だれ、あの声は？ 底なしの穴の中に落ちていく時、遠くでわたしを呼んだあの声はだれ？…ああ！

恵子ナレーション わたしの名は村田恵子。青春高校1年生。なんと、自分の誕生日に、自殺未遂をしたのだ。わたしをそこまで追い詰めたもの…。あれは1年前、わたしが高校受験に失敗した時だった。

恵子の父 (エコー) お前にもう一度チャンスを与えてやる。希望高校は落ちたが、大学は一流校に入れ。兄さんだっって一流校に入ったんだ。お前だっって…。

恵子の母 (エコー) 恵子、同じ苦しみをお母さんたちにも味わわせないで。そのためには、今からでも3年後に備えてしっかり勉強しなくっちゃ。

ナレーション 受験に失敗したわたしを待っていたものは、両親からの非難。そして、滑り止めで受かった高校で、早くも始まっていた3年後の受験への先生方の期待だった。毎日、息が詰まりそうで、わたしは自分がなんのために生まれてきたのか分からなくなってしまい、生活は乱れていった。

《タイトル》

効果音 (街の雑踏)

音楽 (ディスコ音楽)

恵子 あ、由美、ここよここ。

由美 あ、ケイ、今日はずいぶん早いんじゃない。ねえねえ、今日わたしの彼氏の友達に来てるんだけど、その人がさあ、勇君で言うんだけど、その人がケイに一目ぼれなんだって。付き合ってみない？

恵子 男？ カッたるいんだよね、今は、何をするのもさ。

由美 そんなこと言わないでさあ。あ、あの人よ。こっちに來たわ。

勇 ねえ、ケイちゃんでしょう？ 踊らないの？ 一緒に踊ってあげるよ。

恵子 ふん。一人で踊れるわよ。(二人、踊る)あんだ、なかなかやるじゃない。

勇 それはそれは。お褒めにあずかって光栄です。ねえねえ、それでさ、電話してもいい？ アドレスも教えてよ。

恵子 踊りはうまいけど、口は下手ね。バイバイ、わたし帰るわ。

勇 あ、ケイちゃん！

恵子(モノローグ) (家の戸口の前で) ああ、この戸を開けると、また地獄が待ってる。なんて冷たい色をした明らかなんだろう。家族なのに話もしない。お父さんはいつも命令ばかり。お母さんは相づちを打つだけ。わたしは受験に失敗した不良娘。最高の組み合わせだわ。ああ、おかしい！ (笑う)でも、でも今のままじゃ、わたしはどこまで落ちていくの？ 落ちて、落ちて、落ちていく。ああ！

ナレーション お酒やクラブ、そんなものに手を出してはみるものの、何かもっと確かなものを求めている

わたしだった。それがなんなのか、はっきりしないまま、自分をごまかし続けていたのだ。あの事件が起こったのは、そんなある日だった――。

由美 ケイったら、気になるようなことを言っておきながら、結構うまくやってるじゃない。

雄二 そりゃそうさ。あの二人にはうまくいってもらわなくちゃ、おれが困るんだよ。

由美 どういうことよ？

雄二 由美、あの男、知らねえのか？

由美 勇君？ “スペクター”とか言う暴走族のリーダーでしょう？

雄二 ああ。いい女の子を紹介する交換条件で、“スペクター”の分派を作るときは、おれをヘッドにするという約束ができてんだよ。だからあの二人には…。

恵子 雄二。

雄二 ケイ！ お前、踊ってたんじゃ…。

恵子 あんた、わたしを利用しようなんて、いい度胸してんのね。それなりの覚悟はできてんだろう？

効果音 (恵子が雄二を平手で「ピシヤリ」と打つ音)

雄二 何するんだよ！

恵子 ナメんじゃないよ。人のこと、なんだ思ってんの！

由美 恵子、やめて。お願い！

効果音 (イス、テーブルがぶつかる音。はやし立てる周りの声。)

ディスコの男 ちよつとあんた、恵子さんとやら。おれにちよつと顔貸しなよ。

恵子 何すんどのよ。離してよ。

音楽 (BGM)

効果音 (居酒屋のガヤ)

恵子 ここ、どこよ？

男 おれの行きつけの飲み屋。ムカついてんだろ？ 今日知り合いの記念に、パーっと飲もうよ。おれ、あんたとは気が合いそうな感じが、前からしてたんだ。

恵子 おじさん、ヘンな男だねえ。でも気に入ったよ。うん。今夜は思いっきり飲むよ。

音楽 (BGM、次第に高まる)

恵子 …ここは、どこ？ 汚い部屋。そうか、昨日の晩、あいつと…。あ、苦しい…。心臓が苦しい。だれか、だれか…。

効果音 (救急車の「ピーポー」)

父 いいか、今後、学校に行く以外、家から絶対に出すな。電話も一切使わせるな。

母 そんなこと言ったって…。

父 (さえぎって)うるさい！ あの子は家の恥だ。まったく急性アルコール中毒で病院に運ばれるなんて。お前も娘だなんて思うな。

恵子(モノローグ) 余計なお世話だわ。わたしが何をしようと、どうせわたしは…。そうだ、あいつのところに電話して、こんな家、出てやる！

恵子 あ、もしもし、わたし。心配かけてごめん。もう心配しない…。

男 (フィルター音)(さえぎって)悪いけど、切るよ。おれ、もうあんたに用はないし、ゴタゴタはよしてほしいんだよね。それじゃ。

効果音 (フィルター音)電話を切る音。

音楽 (BGM)

恵子(モノローグ) ああ、もうすぐ夜が明ける。16年前の今日、わたしは生まれた。なんのために？ 勉強するため？ 学校なんて。勉強なんて。本当に人間、それで幸せになれるわけないわ。わたしはもうごまかされない。本当の幸せは、死ぬこと。ううん、生まれてこなかったことよ。そうよ、わたしは死んでやる！

ナレーション こうしてわたしは、少しずつためておいた睡眠薬を一気に飲んだ。だんだん意識がもうろうとしていく中で――。

声 おーい、おーい。

恵子(モノローグ) だれ？ わたしを呼ぶのは？ ああ、苦しい…。わたしは死んでいくんだわ。死んで…。だれ、わたしを呼ぶのは？ やめて。引き戻そうとしないで。わたしは死にたいの。

声 (次第に強く)おーい、おーい。おーい。

恵子(モノローグ) ああ、もう一度生まれ変われるのなら、生き直すことができるなら、わたしは、わたしは自分自身をいとおしんで生きたい。死にたくない。生きたい。助けて。助けて。助けて！(多重エコー)(間)

恵子(モノローグ) ここはどこ？ ベッド…。ああ、病院か。わたしは助かったんだ。意識がなくなっていくうちに、落ちていく中で、わたしを呼んだ声。あれはだれだったの？

ナレーション いつしか秋風が吹き始めていた。死の底から引き戻されたのに、わたしを待っていたものは、それまでと同じ、“冷たく、色のない世界”だった。探るような目でわたしを見る母。わたしを避ける父、そして兄。死の世界がわたしを拒んだように、生の世界もわたしを冷たく突き放していた。体は生きているのに、心は死んだままだった。わたしは、あの死の底からわたしを呼びもどした声のことを、考え続けていた。

ある日曜日、わたしは、家族と顔を合わせるのが気まずく、フラフラと家を出て歩いていた。その時、ぱったり、小学校の時に通っていた教会学校の先生に会った。わたしは誘われるままに、礼拝に出た。心の中で、何者かがそう促したのだ。中に入ると、一人の若い男性が、自分が神様を信じた時の話をしていた。

教会の男性 どんな人間でも、神様は愛してくれます。そして、「わたしが神を選んだのではなく、神様がわたしを選んでくださった」という言葉を聖書に見つけた時、僕は新たに力を与えられた気がしたのです。

恵子(モノローグ) 選ばれた、人間？ どんな人間をも、愛してくださる神。死ぬことも、生きることもできなかった“わたしも”愛されている…。もし、それが本当なら、わたしにも、生きられる世界がある。今日を、あしたを、期待できる世界が。新しく生きてみたい！これが、この世界が、わたしが本当に求め続けた世界なんだ。

音楽 (エンドBGM)

ナレーション わたしは、ドキドキする胸の高鳴りを覚えながら、会堂に架けてある、十字架のキリストの絵を見上げた。そのまなざしの中に、あの死の底からわたしを呼び戻した声が、今度はハッキリと、「わたしのもとに来なさい」という招きの声として迫ってくるのを、わたしは感じ取っていた――。

<完>